

## アルベール・カミュ生誕百周年

千々岩, 靖子  
青山学院大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1430742>

---

出版情報 : Stella. 32, pp.39-49, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# アルベール・カミュ生誕百周年

千々岩 靖 子

1913年11月7日、フランス領アルジェリアのモンドヴィでカミュが誕生してから今年でちょうど百年になる。1960年1月に自動車事故により46歳という若さで亡くなったカミュは、活躍の期間こそ短かったものの、世界的名声を獲得した戦後フランスを代表する作家のひとりである。21世紀に入ってからは、すでにプレイアッド新版『全集』4巻本が2006年と2008年に出版され、2010年にはカミュの没後50年を記念した国際コロックが獨協大学にて開催されたが<sup>1)</sup>、今年の生誕百周年はさらにいっそうの盛り上がりを見せており、フランス国内外でカミュ関連の出版やコロック、展覧会などの記念行事が相次いでいる。本稿ではこれらすべてを網羅することはできないものの、カミュの研究動向を概観しつつ、その主だったところを紹介したい<sup>2)</sup>。

## 書簡集

生誕百周年を記念したカミュ関連の出版のなかで最大の目玉となるのは、9月にガリマール社から3冊同時刊行されたロジェ・マルタン・デュ・ガール、フランシス・ボンジュ、ルイ・ギューとの往復書簡集であろう<sup>3)</sup>。いずれもその大部分が未発表テキストであり、今後のカミュ研究の基本文献として活用されることは間違いない。まずはこれらを紹介したい。

はじめにマルタン・デュ・ガールとの往復書簡集について——。これは同作家の研究者クロード・シカールの編纂により、1944年から58年までに交わされた計69通（マルタン・デュ・ガール書簡45通<sup>4)</sup>、カミュ書簡24通）を活字化したものである。周知のように『チボー家の人々』の作者はカミュよりも一世代上であるが、ともにガリマール社との関係が深く、ガストン・ガリマールや『新フランス評論』周辺の作家たち、ジャン・ポーラン、マルセル・アルノー、アンドレ・ジッド、アンドレ・マルローといった共通の知人がいた。両

者の直接的な交流は、1944年12月にマルタン・デュ・ガールが当時レジスタンスの日刊紙『コンバ』の編集に携わっていたカミュに手紙を書いたことから始まる。その内容は、同紙の記事のレイアウトに関する要望といった些細なものであったが、爾来よい距離を保った穏やかな友情が、年長作家が死去する1958年まで続くことになる。

これまで彼らの関係については、プレイアッド版マルタン・デュ・ガール『全集』第1巻(1955年)の序文をカミュが執筆したこと、および『転落』(1956年)のタイトルがマルタン・デュ・ガールの提案によるものだったことなどが知られるのみであったが<sup>5)</sup>、補遺や注が丹念に付されたこの書簡集の出版により、両作家が育んだ友情の具体相が初めて明るみにされることとなった。まず注目に値するのは、マルタン・デュ・ガールがカミュの小説作品はもちろんのこと、それ以上にジャーナリストとしてのカミュを高く評価していた点であろう。例えば1947年6月の手紙で『コンバ』紙から手を引いたことを告げられた彼は12月の返信で、同紙に発表した記事をまとめて出版しようカミュに助言している。また1951年12月16日付の書簡での『反抗の人間』への讃辞、そして1954年のインドシナ戦争に反対する署名(書簡31)をはじめとして、国際情勢関連の署名に際して度々カミュに意見を求めていることから<sup>6)</sup>、マルタン・デュ・ガールが年少作家の政治見解に全幅の信頼を寄せていたことが窺い知れる。

それにもまして心を打たれるのが、書簡集全体を貫くマルタン・デュ・ガールの終始変わらぬ温かい心配りである。とりわけ1957年にカミュがノーベル文学賞を受賞した際には、いち早く祝電を送っただけでなく、受賞を喜ぶよりむしろマスコミの批判に動揺するカミュにたいし、ストックホルムでの式典に出席するよう強く勧め、細々としたアドバイス(受賞スピーチの原稿、礼服、当地の寒さ、ホテル、受賞金の寄付など)を書き連ねた手紙を送る(書簡58)。さらには、自身が受賞した1937年当時の個人的日記(これは1993年に『日記』第3巻として出版された)までも参考に供している。サルトル=カミュ論争を皮切りに、1950年代はカミュにとって失意の時代だったが、大作家の懐深い友情は大きな励ましであり、まさに「生きる助け」<sup>7)</sup>となったであろうことは想像に難くない。

次にポンジュとの往復書簡集であるが、これには1941年から1957年をかけ

て交わされた計 51 通（カミュ書簡 26 通，ポンジュ書簡 25 通）が収められている（編纂を担当したのは詩人のプレイアッド版『全集』全 2 巻〔1999-2002 年〕に携わったジャン＝マリ・グレーズ<sup>8)</sup>）。彼らが初めてリヨンで会ったのは、それぞれのフランス文壇デビュー作『物の味方』『異邦人』が出版されてから 1 年後の 1943 年 1 月 27 日のことであった。その前々年の 8 月，ポンジュはパスカル・ピアを通じて『シーシュポスの神話』（1942 年 10 月出版）の一部原稿を手に入れ、そこで展開される「不条理」に己の問題意識の反映を認めていた。そして感銘を受けたポンジュが、ピアにカミュとの間を取り持つように依頼したことが出会いの発端となったのである。カミュの方も『物の味方』を高く評価し、1943 年 1 月 27 日付ポンジュ宛書簡で、同詩集を「生粋の不条理の作品」として褒め称えている。『物の味方』『シーシュポスの神話』に共通する「不条理」について論じたこの有名な手紙は、「フランシス・ポンジュの『物の味方』について」という題のもと『新フランス評論』1956 年 9 月号に初掲載され、プレイアッド新版カミュ全集第 1 巻にも再録されている。同書簡のほかは、ポンジュのカミュ宛書簡 6 通<sup>9)</sup>、および 1941 年 8 月 27 日付のパスカル・ピア宛書簡が『新フランス評論』1989 年 2 月号にすでに掲載されていたが、それ以外はこれまですべてが未刊であった。

両作家の関係は短くも濃密な知的交流と呼ばれるべきものであろう。書簡集表題は 1941-57 年と期間を記すものの、実際には計 51 通のうち、37 通が 1943 年からパリ解放の翌年 8 月までの短期間に集中している（うち 28 通が 1943 年のもの）。その後、文通は極端に減少し、1944 年 6 月に銃殺された共通の友人ルネ・レイノーの遺作詩集出版に関する遣り取りをはじめとした、事務的な短簡になっていく。書簡集巻頭の紹介文において、ジャン＝マリ・グレーズは疎遠化の契機と考えられる 2 つのエピソードを紹介しているが<sup>10)</sup>、そうした具体的な出来事に起因するよりは、「不条理」を介した出会いが象徴するように、ふたりの友情がそもそも非常に限定的なものだったのではあるまいか。占領下、ともにレジスタンス活動に従事していた両者の絆は祖国解放という目的においては固く結ばれていた。だが大戦後、第 2 の創作サイクルである「反抗」についての思索を深め、共産主義批判へと一気に傾いていくカミュが、共産党支持を継続するポンジュと疎遠になっていったのは自然の流れであるようにも思われる。他の 2 つの書簡集に比べると、このコーパスには補遺が欠けており、註

も必要最小限に留まっている印象を受ける。しかしながら、書簡の多くが自己検閲を強いられた占領期に書かれていることを思えば、内容に不分明な点が多いのも致し方ないことかもしれない。

最後にルイ・ギューとの往復書簡集について——。カミュより13歳年上のギューは1920年代から執筆活動を始めた小説家で、1936年にジッドのソ連訪問に同行、翌年にはアンドレ・マルローが序文を寄せた代表作『黒い血』(1937)を出版。文学史という観点から言えばポピュリズム派に属する作家である(1942年に小説『夢のパン』がポピュリスト賞を受賞)。カミュの父の埋葬地サン＝ブリュー出身のギューは、当地で少年期から青年期を過ごしたカミュの恩師ジャン・グルニエと1917年以来の友人であり、カミュとは1945年夏に共通の版元ガリマル社で初めて会っている。その後ふたりは友情を深め、カミュの死まで親密な交際は続くことになる。

この書簡集は、国際カミュ学会会長アニエス・スピケル編纂のもと、1945年から1959年までに交わされた計62通(カミュ書簡36通、ギュー書簡26通)を活字化している<sup>11)</sup>。カミュがギューについて論じたものと言えば、1948年1月に『カリバン』誌に発表された『『民衆会館』について』が知られているが、そのなかでカミュはギューを「苦しみを描く小説家」とであると評価している<sup>12)</sup>。スピケルが序文末尾で指摘するように、この「苦しみ *douleur*」という主題はカミュがギューから受け取ったものであり、第2次大戦以降の「反抗」についての思索を深める重要なきっかけともなった<sup>13)</sup>。その意味でも、これまであまり注目されることのなかったギューとの交流の全貌が、今回の出版によって公になったことは意義深い。特に1945年から翌年の往復書簡において、ギューが無政府主義者バクーニンやブルードン、そしてプレハーノフやサヴィンコフといったロシアの革命家たちを話題にし、彼らの著作をカミュに貸していることは注目に値する。これらの文献からカミュが受けた強い刺激がやがては戯曲『正義の人』(1949年初演)および『反抗的人間』(1951)へと昇華していくのである。附註は細微にわたり、グルニエを含めた3者の交流を詳しく年譜にして補遺に付するなど、スピケルの力のこもった仕事は見事である。

## 証言録・研究書・雑誌特集号

まず、生誕百周年を記念して9月に出版された『アルベール・カミュ』を紹

介したい<sup>14)</sup>。同書はレルヌ社が各作家を特集したシリーズ「カイエ・ド・レルヌ」の一冊であり、上述のアニエス・スピケルおよびプレイヤッド新版カミュ全集を編纂したアメリカ人研究者レイモン・ゲイ＝クロズィエが総指揮にあたり、いずれもが序文を執筆している。およそ400頁近い本書の協力者は総勢57名。当時のカミュと親交があった人々（その多くは故人）のほか、アンドレ・アブー、マリー＝テレーズ・ブロンドー、クリスティアーヌ・ショーレ＝アシュール、モーリス・ヴェイエンベルグ、ピエール＝ルイ・レイ、三野博司など、第一線の研究者が名を連ね寄稿している。「人」「場所」「演劇」「小説」「思想」「政治」というテーマごとに章立てされ、各テーマに従って作家のテキストの抜粋や書簡、当時のカミュにまつわる証言や資料、研究者による論考など異なるレベルの言説が組み込まれ、結果として総合的なカミュ像が提示されるようになっている。再録の資料や証言もあるが（それだけでも様々な分野における証言が一堂に集められる点で有意義である）、未刊行書簡や新たな証言などが多く収録されており、資料という点からも貴重である。小学校時代の恩師ルイ・ジェルマンとの計10通の往復書簡<sup>15)</sup>、『カリバン』誌および『エクスプレス』誌とともに働いた同郷のジャーナリスト、ジャン・ダニエルとの往復書簡計15通、F.B.I.による1946年のカミュ調査書などの未刊行資料のほか、オリヴィエ・トッドが『アルベール・カミュ——ある一生』（1996年刊）執筆の際に集めた作家周辺の人々の証言や、本特集のために行われたと思しきスピケルによるインタビュー数点も収録されている。とりわけ注目されるのは、4月に行われたカミュ晩年の愛人メット・イヴェールの6頁にわたるインタビューであろう。トッドが著した伝記で初めて「ミー」の愛称で存在が明らかにされた彼女は、おそらくカミュ家への配慮から長年匿名と沈黙を守ってきた。作家の知己はほとんどが鬼籍に入っているだけに、(1957年以降の短期間とはいえ)彼を深く知る人物からの新証言がえられたことはまことに意義深い。

証言録としては、アベル＝ポール・ピトゥーの『親愛なるアルベール——アルベール・カミュへの手紙』（9月刊）を紹介しておきたい<sup>16)</sup>。著者はカミュと同じ1913年の生まれ、アルジェ・ベルクール街の幼友達である。ふたりは1922年に小学校で知り合い、カミュが1924年にリセへ進学することで進路が分かれるが、しばらくは両者の友情はサッカーによって結ばれていた<sup>17)</sup>。だが1930年にカミュのバカロレア取得、大学進学で交際は途絶えてしまう（また同年罹患

した肺結核のためにカミュはサッカーを断念)。このピトゥーによるカミュへの「手紙」は1970年代にすでに執筆されていたのだが、これまで出版されることはなく、その息子が今年初めにガリマール社に原稿を渡すことで公開の運びとなった。同書では、両者の結びつきであるサッカーの話題だけでなく、小学生生活、カミュの母親や叔父にまつわる思い出も語られている。これまで作家の幼少期については、自伝的小説『最初の間』がほとんど唯一の情報源であっただけに、なおのことピトゥーの証言は貴重である。

研究書にかんしては、今年5月に刊行されたジャンイヴ・ゲランによる『アルベール・カミュ、政治と文学』を挙げておこう<sup>18)</sup>。カミュの政治思想を専門とするゲランはすでに、作家のジャーナリズム活動および政治思想を年代順に辿り、その変遷を明らかにした名著『カミュ——市民芸術家の肖像』(1993年)を上梓している<sup>19)</sup>。新刊書では新たにフィクションと政治思想の関係が掘り下げられており、前著以上に充実した内容となっている。演劇作品はカミュの時事的関心を直接的に反映していると言われているが、『カリギュラ』『戒厳令』『正義の人々』に見られる全体主義の表象を分析した第2部はとりわけ注目に値する。

雑誌について——。まず、『ル・フランセ・ダン・ル・モンド』誌9-10月号が約10頁にわたってカミュの特集を組んでいる<sup>20)</sup>。「アルベール・カミュ、このなじみの異邦人」というタイトルのもと、アルジェリアと作家の関係、政治・思想におけるカミュの再評価、『異邦人』の解説などが収録されている。これら一般読者向けの記事には特筆すべき点はないが、ピエール・ルイ＝レイのインタビューは短いながらも読み応えがある。カミュと同じベルクール街で育ち、小説家でもあるこの研究者による指摘は常に示唆に富み、このインタビューにおいても作家とフランス語の関係についての話は興味深い。

また『ル・モンド』紙が10月に、カミュの政治と思想に重点を置いた特別号を組んでいる<sup>21)</sup>。年譜や、様々なテキストからの抜粋、サルトル＝カミュ論争およびアンドレ・ブルトンとの論争の遣り取り、サルトルやウィリアム・フォークナー、ジャン・スタロバンスキーなどによる追悼文など、掲載資料は特段目新しくはないが、大著『サルトルの世紀』で知られたベルナル＝アンリ・レヴィによる約10頁にわたるカミュのポートレートは目配りの行き届いたバランスのよいものであり、カミュの受容について語ったジャンイヴ・ゲランのイン

タビューも一読の価値がある。

我が国においては、1994年以来毎年刊行されている『カミュ研究』（日本カミュ研究会）が6月に第11号特別号を刊行した<sup>22)</sup>。通常のおよそ倍の頁数からなる同号は、作家と親交のあったロジェ・グルニエが序文を寄稿している。日本語およびフランス語による12本の論考を収録するほか、日本におけるカミュ研究の総括として、伊藤直・三野博司が共同で「日本におけるカミュ受容」と題する論考を日本語・フランス語両語で執筆している。

### 展覧会・コロック

カミュの生誕百周年を記念した展覧会やコロックは規模の大小を問わず数え切れない。そのためここでは最も重要なものに限って紹介しよう<sup>23)</sup>。

展覧会のなかで最も規模の大きなものは、作家の草稿の多くを収蔵するエクサン＝プロヴァンス市メジャーヌ図書館を会場に、10月5日から3カ月にわたって開かれる「世界市民アルベール・カミュ」展である。準備段階における人事トラブルがメディアで大きく取り上げられたものの、紆余曲折を経て無事に開催される運びとなった。ガリマール社から出版されたカタログには、エクサン＝プロヴァンス市長とエックス区長が序文を寄せ、編纂と解説はソフィー・ドゥーデ、マルセル・マアセラ、ピエール＝ルイ・レイ、アニエス・スピケル、モーリス・ヴェイエンベルグが担当している。このカタログは年代順で編成されておらず（カミュ年表は巻末の収録）、「場所」「友情」「職業」「遊び」「言語」「戦争」「歴史」「正午の思想」「愛」「王国」という10のキーワードによって章立てされている。およそ200頁をもちい、作家の写真や草稿・タイプ原稿、書影、演劇のポスター、新聞・雑誌の切り抜き、当時の状況を理解するための写真などの様々な資料が配置されており、非常に見応えのある美しいカタログとなっている<sup>24)</sup>。

最後にコロックについて——。国際カミュ学会主催により、大規模な国際コロックが8月17日から1週間、パリ郊外のスリジー文化センターを会場として開催された。「芸術家カミュ」という題のもと、アニエス・スピケル、ソフィー・バスチアン、アンヌ・プルトゥーの3人が総指揮をとり、様々な国籍と年齢の研究者による22の発表と2つの討論会が行われた。日本カミュ研究会のメンバーからは6名が発表者として参加している。高塚浩由樹が、カミュの創作日



記である『手帖』の修正と『最初の人間』執筆の関係について論じ、稲田晴年が、カミュが自ら打ち出した現実世界の修正としての芸術という観点から『最初の人間』を論じたほか、三野博司、伊藤直、東浦弘樹、フィリップ・ヴァネイの4人が「カミュと日本」と題した討論会を行っている。このコロックは学術的な発表だけでなく、各日程のソワレの時間帯には、日本でも昨年末に公開されたイタリアのジャンニ・アメリオ監督による映画『最初の人間』、およびルキノ・ヴィスコンティ監督による『異邦人』が上映されたほか、ジャック・フェルナンデスによるバンド・デシネ『異邦人』の紹介、演出家ヴァンサン・シアノによるカミュ劇のモンタージュの上演など、研究者だけでなく愛好家に対しても門戸を開く工夫がされていた。コロックの報告書は出版予定である（時期や出版社は未定）。

\*

生誕百周年をめぐる現況を駆け足で紹介したが、ここで挙げたものはカミュ研究にかかわる重要なものに限られている。本文では紹介できなかったドキュメンタリー映画の製作や<sup>25)</sup>、たびたび組まれるラジオの特集など、民間レベルにおける熱狂はそれ以上である。節目の年を迎え、カミュがついに歴史的な回顧の対象となったことに一抹の寂しさはあるが、このたびの様々な出版や関連行事の充実ぶりこそは、彼が現代に訴えかける存在であり、その作品や思想が今もなお生きていることの力強い証といえるであろう。

註

- 1) 「アルベール・カミュ——現在の感受性」という題のもと開催されたこのコロックの報告書は『カミュ研究』第10号特別号として2011年5月に刊行された。
- 2) なお、カミュ作品からの引用は新ブレイアッド版『全集』(Albert CAMUS, *Œuvres complètes*. Édition publiée sous la direction de Jacqueline LÉVI-VALENSI (t. I et II) et de Raymond GAY-CROSIER (t. III et IV), Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 2006-2008) に依拠し、典拠表示は巻数と頁数のみを [ ] に入れて本文中に記す。
- 3) Albert CAMUS - Roger MARTIN DU GARD, *Correspondance 1944-1958*. Édition établie, présentée et annotée par Claude SICARD, Paris : Gallimard, 2013 ; Albert

CAMUS - Francis PONGE, *Correspondance 1941-1957*. Édition établie, présentée et annotée par Jean-Marie GLEIZE, Paris : Gallimard, 2013 ; Albert CAMUS - Louis GUILLOUX, *Correspondance 1945-1959*. Édition établie, présentée et annotée par Agnès SPIQUEL-COURDILLE, Paris : Gallimard, 2013.

- 4) ただしこれには、マルタン・デュ・ガールがカミュの作品について述べた1955年5月28日付の覚書（書簡42）が含まれている。
- 5) 本書に収録された1956年3月13日付書簡からもわかるように、カミュは『転落』の草稿をマルタン・デュ・ガールに送り意見を求めていた。
- 6) これに付け加えて、マルタンデュガールは1956年のハンガリー動乱についてカミュが書いた記事に賛同する手紙（書簡49）を送るなど、同様の例には枚挙にいとまがない。
- 7) マルタン・デュ・ガールの死去に際し、カミュは1958年8月、『フィガロ・リテレル』誌に「Il aidait à vivre」という題の追悼文を掲載した。
- 8) この書簡集には合計57通が収められているが、カミュとボンジュの往復書簡計51通の他に、ボンジュのパスカル・ピア宛（書簡1）、ボンジュの覚書（書簡37）、ボンジュのピエール・エルベ宛（書簡38）、ボンジュのジャン・セナルおよびパスカル・ピア、カミュの3者宛（書簡42）、ガブリエル・オーディジオのボンジュ宛（書簡50）、ボンジュ夫妻のクリスチアヌ・フォール（カミュの妻フランシーヌ・フォールの姉）宛（書簡57）が収録されている。
- 9) 1943年に書かれた4通（3月3日、8月9日、9月25日、12月8日）、および1944年3月9日付、1947年8月16日付。
- 10) 1つめは、ジャン・ポーランとボンジュの往復書簡集で编者クレール・ボッテロが紹介したエピソードである。第2次大戦中、カミュとボンジュが所属していたそれぞれ別のレジスタンス集団（前者は「コンバ」、後者は共産党の「国民戦線」）は行動をともにしていた。しかし大戦後には立場の違いが明確になり、ボンジュがアラゴンの依頼で文化欄を担当していた日刊紙『アクション』に、ピエール・エルヴェが幾人かのレジスタンス活動家を批判する記事が掲載された。この活動家が具体的に誰なのか名指しはされなかったが、カミュは自分についての批判だと誤解してしまったらしい。続いて2つめのエピソードは、ハーバート・ロットマンが執筆したカミュの伝記からの紹介である。1944年にカミュとボンジュ、ミッシェル・ガリマルの3人がアンドレ・マルローの映画『希望』のフィルムを、マルローの息子と母親がいる家まで運んだ時のことである。その瀟洒な家にある上品な椅子に座りこみ、テーブルに両足を載せたカミュの振る舞いにボンジュは気分を害したという（voir CAMUS - PONGE, *Correspondance 1941-1957*, *op. cit.*, pp. 20-21）。
- 11) これらの書簡のうち、カミュの2通には正確な日付が記されていない。また両作家の往復書簡に加えて、カミュの妻フランシーヌとギユーの往復書簡（書簡31, 32）、およびカミュがギユーの妻ルネに宛てた手紙（書簡58）が収録されている。
- 12) Voir CAMUS - GUILLOUX, *Correspondance 1945-1959*, *op. cit.*, p. 165. さらにこの

評論でカミュはギューとの興味深い遣り取りを書き留めている——「別のある日にギューは、われわれの友人のひとりの嘲笑的な気質について、皮肉は必ずしも悪意の印ではないと指摘した。だが皮肉は善意の印とも考えられないと私は答えた。〈そう〉とギューは言った。〈けれどもそれは苦しみの印なんですよ。こちらは他人のそういう気持ちを全然考えたりはしないけれどもね〉」(*idem*)。ちなみにこの評論は、1953年に『民衆会館』がグラッセ社で再版されるさいに『『民衆会館』への序』という題のもと再録されている。

- 13) 例えば1948年に行われた「自由の証人」という題の講演で、カミュは以下のように述べている——「彼ら〔=真の芸術家〕は、肉体の証人であって法の証人なのではありません。自分たちの天職によって、敵対者でさえも理解する運命にあるのです。それは彼らが善悪を判断することができないということの意味するものではありません。そうではなく、他人の生を生きるという能力によって、極悪の犯罪者のなかにも、常に人間を正当化するもの、すなわち苦しみを認めることができるのです」[II, 494]。『反抗の人間』で繰り上げられた「反抗」の最終目的は、「反抗者」と「抑圧者」との和解、つまり両者の共同性の確保であり、「苦しみ」こそが両者を結びつける紐帯として機能するとカミュは考えた。この主張は、アルジェリア独立戦争のさなかの1956年1月22日にアルジェの群衆の前で行われた演説「アルジェリアにおける市民休戦のためのアピール」でも展開されている [IV, 374]。また『転落』(1956)に付された著者の言葉からもわかるように [III, 771]、「苦しみ」は小説の大きな主題のひとつとなっていることも付け加えておこう。
- 14) *Albert Camus, dirigé par Raymond GAY-CROSIER et Agnès SPIQUEL-COURDILLE, coll. «Les Cahiers de l'Herne», Paris : L'Herne, 2013.*
- 15) そのうち、カミュがルイ・ジェルマンに宛てた1957年11月19日付書簡は、1994年に初めて出版された『最初の人間』の補遺に収録されていたが、それ以外の書簡はすべて未刊である。この恩師は『最初の人間』ではベルナルド氏として登場し、1945年に国土防衛軍の制服を着てバりに住むジャックの家を訪れたという小さなエピソードが語られている [IV, 838]。この記述は、今回収録された1945年10月15日付ジェルマン書簡の内容と完全に一致している。
- 16) Abel Paul PITOUS, *Mon cher Albert. Lettre à Albert Camus*, Paris : Gallimard, 2013.
- 17) カミュがサッカー仲間とともに写った有名な写真があるが、ゴールキーパーのカミュの右側で片膝をついている少年が著者である。
- 18) Jeanyves GUÉRIN, *Albert Camus, littérature et politique*, Paris : Honoré Champion, 2013.
- 19) Jeanyves GUÉRIN, *Camus, portrait de l'artiste en citoyen*, Paris : François Bourin, 1993.
- 20) *Le Français dans le monde*, n° 389, septembre-octobre 2013, pp. 46-55.
- 21) *Albert Camus 1913-1960. La révolte et la liberté*, *Le Monde*, hors-série, octobre

2013.

- 22) 『カミュ研究』11号, 日本カミュ研究会, 青山社, 2013年.
- 23) 展覧会やコロックの詳しいリストは国際カミュ学会の運営するウェブサイトに掲載されている。
- 24) *Albert Camus, citoyen du monde, textes et choix de documents* par Sophie DOUDET, Marcelle MAHASELA, Pierre-Louis REY, Agnès SPIQUEL-COURDILLE et Maurice WEIEMBERGH, Paris : Gallimard, 2013.
- 25) 世界各国のカミュの愛読者を取材した『カミュと生きる』«Vivre avec Camus»という題のドキュメンタリー映画が今年10月7日にフランスでプレミア上映された。日本からは東浦弘樹・関西学院大学教授が登場している。この映画はフランスのテレビ局アルテでショートバージョンが10月9日に放映された。